

女性学評論 第28号 Women's Studies Forum No. 28 (Mar. 2014)

性的話りの見えない構造：
橋下徹大阪市長の「慰安婦」「風俗活用」発言をととして

景 山 佳代子

Invisible Structures in Sexual Discourse:
An Examination of Osaka City Mayor Toru Hashimoto's Comments about 'Comfort Women' and 'Sexual Service'

KAGEYAMA Kayoko

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 専任講師

連絡先：景山佳代子 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
kageyama@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

The purpose of this paper is to study the discourse of Osaka Mayor Toru Hashimoto's comments about WWII 'comfort women', to examine how his explanation of Japan's 'comfort women' is related to invisible sexual practices in our day-to-day life.

Using the textual data of Hashimoto's twitter comments and the records of his press conferences and through analysis using the computer coding program KH Coder, we found that he pointed to the responsibility of other nations' militaries as sexual assailants of women during wartime by using the concept of 'women's human rights'. On the other hand, he didn't apply this universal standard to Japan's actions toward the Korean comfort women. As a result, the debate about 'comfort women' shifts the responsibility from Japan's military to others, including Japan, and Japan's responsibility becomes vague.

Here the important thing is that his rhetoric is not unique and is taken for granted by a certain type of people. His discourse on comfort women is based on our daily communication, which does not focus on the subjectivity and social factors of sexual problems in Japanese society. In this paper, we further our understanding of how we identify invisible structures that exist as part of our common sense from visible discourse.

Keywords: comfort women, sexual service, discourse, invisible structures

要 旨

本研究では、2013年5月13日の橋下徹大阪市長の慰安婦発言を研究することで、その語りがいかに私たちが当たり前に行っている性の実践と結びついているかを明らかにする。

橋下氏のツイッターでのコメントおよび記者会見での発言のテキストを、KH Coder と呼ばれるコーディングプログラムを使って分析し、慰安婦問題という文脈での橋下氏の語りの特徴を明らかにした。彼は世界の軍隊も、性の対象として女性を利用したという点では、日本と同じ加害者であると指摘した。それは日本の韓国慰安婦に対する責任を曖昧にする（不可視化していく）語りとなっていた。

重要なのは、彼のこうした語りが決して特殊なものではなく、私たちの日常の語りと地続きのものであるということだ。性的な問題の社会的要因を不問にし、その問題の主体が誰かを見えなくする。橋下氏の「慰安婦」「風俗」という問題の論じ方からは、そんな自明とされる性の見えない構造が浮かび上がってくる。

キーワード：慰安婦、風俗、語り、見えない構造

1. 「出来ごと」としての「慰安婦」「風俗」発言

公益財団法人フォーリン・プレスセンターのホームページで、「注目すべき海外メディアの日本報道」として、一地方自治体の大阪市長の発言が取り上げられた。2013年5月13日に、橋下徹大阪市長が記者会見で、「(戦時下に) 慰安婦制度が必要だということは誰でもわかる」「沖縄の米兵に風俗業をもっと活用してほしい」と発言したことがきっかけだった。この発言はアメリカ政府高官からの批判もうけるほど国際的な波紋を引き起こした。5月27日には、国内メディアによる「誤報」を訂正し、橋下氏の発言の「真意」を説明するため海外記者に向け会見が開かれた。しかし会見後も海外メディアからの理解が得られたとは言い難かった¹。

その一方で、会見をみた国内のネットユーザーの一部からは「(橋下氏の) 言っていることは正しい」「その主張に同意できる部分もある」などの支持を得た。また5月30日に、大阪・茨木市長が定例会見で、「若い人たちが明日にも死ぬ(ような状況の) 中で、コンフォート(慰安)を求めた気持ちは理解できなくもない。(橋下氏は) おおむね正しい」と発言したことが毎日新聞で報じられる(毎日新聞、2013年5月31日)。

このように橋下氏の慰安婦発言をめぐるのは大きく二つの評価がみられた。国内外のマスメディアでの橋下批判と、SNSやツイッターなどのネットメディアや日常会話での(とくに男性を中心とした) 橋下擁護の声。橋下氏は27日の会見に先立ち、慰安婦問題について「国際スタンダード」での議論が必要と繰り返していたが、実際に彼の会見を評価したのは国際社会の方ではなく、むしろドメスティックな層だった。「慰安婦」や「風俗」といった性の問題について、国際社会に通用する普遍的な価値を訴えたはずがむしろ、日本社会のある種のローカルな常識の言語化になっていたことは、その語りにそれだけ私たちの「自明とする常識」が埋め込まれているという意味で、非常に興味深い。

この一連の出来ごと²を、「慰安婦」や「風俗」といった性をめぐる橋下氏の個人的主張の問題として見ることは簡単だろう。確かに問題の発端となった5

月13日はそうだったかもしれない。しかしその後の橋下氏の発言やコメントは、複数のアクターとのコミュニケーション過程のなかで理解されるべきものである。各方面からの批判を受け「学習」し、何を訂正し、何を主張すべきかが練り上げられていく。そうして準備された語りに埋め込まれた「常識」がどのようなものかを明らかにしたい。そのためにまず、この語りが出来上がっていくまでの過程を追っていく。2013年5月13日以降の橋下氏の発言、それを取り上げるマスメディアや外国政府・メディアからの批判、それに対する橋下氏の再批判の言説など、様々なアクターのそれぞれのリアクションとその組み合わせが引き起こしたダイナミクスを追っていく³。そのうえで、橋下氏の発言内容がどのようなものであったかを KH Coder と呼ばれるコーディングプログラムを使って分析し⁴。「慰安婦」や「風俗」についての語りがどのような構造を持っていたのかを明らかにする。

2. 「慰安婦」「風俗活用」発言をめぐる出来ごとの経過

2-1. 5月13日の囲み取材：「慰安婦」「風俗活用」発言のきっかけ

橋下徹氏は大阪府知事に就任した2008年当時から毎日、庁舎での囲み取材を続けている。テレビカメラの前で「ライブ感」あふれる記者とのやりとりを披露することは、継続的にメディアに露出する機会となるばかりではなく、時にはそれが大きな「話題」となって橋下氏への注目度を高める役割も果たしていた。今回の「慰安婦」「風俗業」発言が飛び出したのも、この囲み取材の時であった。

2013年5月13日の登庁時、記者が、前日に自民党の高市早苗政調会長が村山談話について「侵略という文言を入れているのは私自身しっくりきていない」と発言した⁵ことへのコメントを求めた。橋下氏は、日本は敗戦国だから「敗戦の結果として侵略だということはしっかりと受けとめなくてはいけないと思いますね」と、高市氏の発言とは一線を画する意見を述べた。その直後、「ただね、事実としては言うべきことは言っていないかと思っていますから、僕は。従軍慰安婦問題だってね、」と突然従軍慰安婦の問題について語

り始める。そして慰安婦をめぐる歴史認識について熱弁をふるった後半部分で、のちに新聞やテレビで何度も報じられることになった発言が飛び出す。

そりゃそうですよ、あれだけ銃弾の雨嵐のごとく飛び交う中で、命かけてそこを走っていくときに、そりゃそんな猛者集団といえますかね⁶、精神的に高ぶっている集団、やっぱりどこかで休息じゃないけども、そういうことをさせてあげようと思ったら、慰安婦制度ってのは必要だということとは誰だってわかるわけです。

このあとも橋下氏は、慰安婦の「証拠」についての発言と、負けた国なのだから認めることは認める、という主張を繰り返す。登庁時の取材が終わるまで、慰安婦について語っているのは橋下氏だけである。そして退庁時の囲み取材がしばらく進んだところで、一人の記者が5月25日、26日に来日する元慰安婦との面会予定を聞き、橋下氏は「慰安婦の方には、配慮が必要だ」という見解を述べる。そして第二次世界大戦前の時代においては、慰安婦の意に反してかどうかはともかく、「軍を維持するとか軍の規律を維持するためには、そういうことが、その当時は必要だったんでしょね」と述べる。この慰安婦制度が当時は必要だったという発言をうけて、記者はさらに「今は違う？」と質問する。この質問への回答がメディアで大きく取り上げられることになった「風俗」発言である。

今はそれは認められないでしょう。でも、慰安婦制度じゃなくても風俗業ってものは必要だと思いますよ。それは。だから僕は沖縄の海兵隊、普天間に行った時に司令官の方に、もっと風俗業活用して欲しいって言ったんですよ。そしたら司令官はもう凍り付いたように苦笑いになってしまって、「米軍ではオフリミッツだ」と「禁止」っていう風に言っているっていうんですけどね、そんな建前みたいなこというからおかしくなるんですよ。

会見は、記者が二言、三言質問すると、橋下氏がずっと喋り続ける形で進み、橋下氏に直接的な批判や大きな反発がぶつけられたようには見えない。米軍キャンプについても、彼はとくに聞かれたわけでもないのに発言している。会見は、橋下氏が風俗業の活用を勧めた司令官が、普天間基地の司令官であるかを簡単に確認して終わる。少なくとも会見後に、彼の発言が、国際的にも大きく取り上げられることになるとは予想もしていなかったのではないだろうか。

2-2. 5月14日から5月16日：橋下批判のはじまり

翌5月14日には米軍に風俗業の活用をすすめたという橋下氏の発言を各メディアが一斉に取り上げる。「維新・橋下氏が慰安婦是認発言＝在沖米軍には風俗業利用促す－与野党から批判」（時事通信 5月13日）、「＜橋下氏慰安婦発言＞「女性への冒とくだ」…市民団体も反発」（毎日新聞 5月14日）、「橋下氏発言 女性は道具か 県内反発「男性にも侮辱的」」（琉球新報 5月14日）、「米国防総省「ばかげている」橋下氏の「風俗業」発言に」（朝日新聞 5月14日）、「橋下氏の「風俗業活用」発言を批判、民主国対委員長」（産経新聞 5月14日）、「橋下氏発言に女性団体憤慨「最低の発想」」（沖縄タイムス 5月14日）など。

これら報道は共通して、橋下氏の発言の以下二点に言及していた。一つは戦地で荒ぶる兵士に休息を与えるために、「慰安婦制度ってのは必要だということとは誰だってわかる」という発言。もう一つが米軍司令官に「もっと風俗業活用して欲しいって言った」という発言である。これに対して、メディアばかりでなく、国会議員や沖縄県民、女性団体などからも厳しい声があがる。ただし彼の発言が、各方面で批判されるのは今回がはじめてではない。物議を醸す挑発的物言いで話題にされるのは、彼の政治手法の一つともいえよう。しかし今回の「慰安婦」「風俗活用」発言には、それまでとまったく異なるアクターが登場し、橋下氏のその後の発言やメディア対応に大きな影響を及ぼしていく。それが海外メディアや外国政府からの批判である。

昨今、一地方自治体の首長の発言がこれほど大きく海外で取り上げられるというのは異例なことだった。韓国の通信社聯合ニュースは、橋下氏の慰安婦発言を、「日本「韓国に外交ルート通じ説明」＝橋下氏「妄言」」（5月14日）と即

座に報じる。この反応はある意味当然とも言えるが、橋下発言への反応は中韓エリアにとどまらなかった。BBC は 5 月 14 日に「Japan WWII ‘comfort women’ were ‘necessary’ –Hashimoto」というニュースを配信。ワシントンポストでも同日「Osaka mayor says wartime sex slaves were needed to ‘maintain discipline’ in Japanese military」と報道する。

5 月 16 日、事態が深刻であることをみた橋下氏は囲み取材で米軍司令官に対して風俗活用を勧めたことは不適切だったと認める。アメリカの文化や宗教に対する理解が不十分であり、その点「国際感覚に乏しかった」と、アメリカへの配慮をみせる。しかしこのような橋下氏の「釈明」もアメリカには通じなかった。

2-3. 5 月 17 日から 5 月 24 日：メディアへの批判、収束への模索

5 月 17 日、米國務省のサキ報道官が会見で「(橋下氏の発言は) 言語道断で不快だ」と批判。米政府の高官が公式の場で日本の政治家をここまで強く非難するのは極めて異例のことである。同日夕の囲み取材で、橋下氏は「自分の英語力がないことが問題」「自分の言いたいことがちゃんと伝えられていない」と説明。さらにサキ報道官からの批判について「アメリカから名指しで批判されることは(米兵の性犯罪の問題が考えられるきっかけになるから) 幸い」と語った。自分に不利な状況で、「余裕」とも受け取れる切り返しを見せていたが、会見終盤、雲行きが変わった。朝日新聞記者が「慰安婦が必要だった」という言葉の意味を明確化するよう求めると、「じゃ囲み(取材) 全部やめましょうか」と記者を問い詰める。彼はそれまでの苛立ちをぶつけるように「朝日新聞なんて最低ですよ」「毎日新聞のあのタブロイド紙も最低ですね」「大誤報をやられた」とメディア批判を始め、囲み取材の中止を宣言し、その場を立ち去った。

土日となる 5 月 18 日、19 日、彼はツイッターやテレビ番組出演で自分の主張を繰り広げる。18 日のツイッターでは、怒り心頭という具合に、毎日新聞や朝日新聞、TBS、週刊文春などを「バカ」「頭が悪い」「ド間抜け」と罵倒する。19 日のツイッターでは「世界のメディアは自国が侮辱されたときには徹底して

抗議する。ところが朝日新聞はあろうことか、わざわざ日本国を貶めるようなことを世界でやる」などと非難する。「バカ」「頭が悪い」という感情的な雑言はなくなるが、朝日新聞の橋下氏批判は「日本国」を貶めるものとして意味付けられる。

囲み取材の中止を宣言した週明け5月20日、橋下氏は早々に囲み取材を再開する。21日のツイッターでも囲み取材を再開した理由を述べ、変わらず朝日新聞批判を繰り返している。5月22日には橋下氏が訪問を予定していた大阪市の姉妹都市サンフランシスコ市幹部より、「公式訪問としては扱わない。表敬訪問も受けない」と、橋下氏の訪問を拒絶する内容の文書が大阪市に届く。ただしこの件についてはしばらく公表されなかった⁷。5月24日には、韓国から来日していた元従軍慰安婦の韓国女性二人が、「謝罪パフォーマンスを拒否する。市長に会う価値も理由もない」というメッセージを発表し、大阪市長との面会中止を申し入れた。海外からの批判は収まる気配をみせず、5月24日から31日までツイッターでの発信が止まる。

2-4. 5月27日から31日：慰安婦問題の継続とメディアへの攻撃

週明け5月27日、東京・有楽町の日本外国特派員協会で国内外の記者に向けた会見が開かれ、同協会の記者会見では異例ともいえる400人近い記者が詰めかけた。会見冒頭で橋下氏は、「発言のひとつの「ワード」が抜き出されて報道されたのが、今回の騒動の原因」だと説明したのち、事前に配布した「私の認識と見解」という文書を約20分かけて朗読した。その後、質疑応答に入り、慰安婦問題における国家責任、河野談話などについてコメントを求められた。橋下氏はこれらの質問に対して、おおよそ次のような回答を繰り返した。「日本の慰安所の多くの雇用主は民間業者であったが、軍が施設に関与していたことも間違いない。ただし日本が国家の意思として女性を拉致、人身売買したという歴史的事実を裏付ける証拠はない。慰安婦として女性を利用したことは許されないが、それは当時世界各国で行われていたことでもある。日本特有の問題ではなく、世界各国が女性の人権を蹂躪していた過去に向き合わなければならない」。また米軍司令官に対して風俗活用を勧めたことは「不適切だった」

と認めたものの、慰安婦は当時必要だったという発言については撤回も謝罪もしなかった。

海外メディアからの批判に直接答え、誤解を払拭しようとした会見だったが、会見後も橋下氏を取り巻く厳しい状況は変わらなかった。28日の囲み取材で、「(前日の記者会見で) 理解は得られたとお考えですか?」と質問されると、「いや一回では無理でしょう」「各国の記者も慰安婦問題については一定の考え方で固まっているから、僕の考えに納得できない記者がいるのは当然だと思います」と回答する。29日には大阪市長定例記者会見が開かれるが、ここでもやはり質問の多くは慰安婦問題に集中した。サンフランシスコ訪問が、橋下氏の発言を理由に中止になったことも発表されており、その件についての質問も記者から相次いだ。さらに30日には大阪市議会の本会議で、橋下市長への問責決議案が提出された。公明党の反対により決議案自体は否決されたが、彼を取り巻く政治情勢が非常に厳しいことをメディアは報じた。31日に橋下市長は大阪府庁での公務会議に出席する。大阪市 HP の市長日程を見ると、大阪市庁舎に登庁せず、囲み取材も行われていない。ただしツイッターは5月24日から約一週間ぶりに再開され、メディアとくに毎日新聞への批判が繰り返されていた。28日、29日の会見の席上でも橋下氏は毎日新聞を批判しており、まさにそうした鬱憤が爆発したような書きぶりになっている。

5月13日からほとんど毎日のように慰安婦問題の対応に追われ、「誤解」を解くための会見も功を奏さず、橋下氏は政治的にも窮地に立たされていった。その苛立ちはメディアへと向けられ、今回の騒動の原因はメディアの「大誤報」によるものだと語られていく。

慰安婦問題をめぐる橋下氏とメディアのやりとりはまるで平行線のようにも見える。しかしこの3週間で、彼は慰安婦発言についての海外メディアや政府からの批判を学習し、自分の支持層の意見と調整しながら、反論を用意していった。その資源は、私たちが常識や正論と呼ぶものから調達してきたものにほかならない。それゆえ彼の議論は、私たちの性をめぐる議論を考えるうえで非常に興味深いものとなる。

次章からは橋下氏のツイッター、会見記録（5月13日、15日、16日、27日）をコーディングプログラムのKH Coderで分析していく。「慰安婦」「風俗業」といった性をめぐることがらが、どのような文脈に位置づけられ、どういう「問題」として提示されているのか。そこでどのような「常識」が用いられ、またなにが「正論」として語られるのか。一定層の人々が橋下氏の発言にある種の共感やリアリティを抱いた、その「下地」について考えていきたい。

3. 「慰安婦」「風俗活用」発言の見取り図—KH Coderによる分析

KH Coderは、インタビューやアンケートの自由記述といった質的なテキストデータの量的分析を行うコーディングプログラムである⁸。KH Coderには、大量の文字データを、1) 同一のコーディングルールに従って、2) 短時間でコーディングし、3) 分析の妥当性を第三者に開示し共有しながら、4) データの全体像を把握できる、という利点がある。KH Coderのホームページには、2013年時点で595件の研究事例が登録されており、その研究分野も社会学のみならず社会心理学、言語学、教育学、建築学と多岐にわたる。質的データの分析ツールとして開発されたKH Coderの汎用性の高さを反映したものであろう。このKH Coderを用いて、橋下氏の一連の発言とその潜在的構造を明らかにしていく。

3-1. 橋下氏コメントの頻出語

KH Coderにはデータ全体で出現回数の多い上位150語を出力する機能がある。今回は会見記録とツイートから抽出された上位50語について表にした（表1）。

今回データでは延べ17,553語がカウントされたが、上位8つの出現回数だけで約1割を占めていた。なかでも「日本」の出現回数は圧倒的に多く（507回）、2番目に多かった「慰安婦」（234回）の倍以上出現している。これに上位8位以内の「世界」（229回）や「アメリカ」（195回）、さらに「各国」（86回）、「国」（52回）、「国家」（45回）といった単語を加えると、橋下氏が日本と世界、ある

いは日本と日本以外の国について繰り返し言及していることが分かる。

一方で、「慰安婦」や「風俗活用」といった発言について、先ほど見た「慰安婦」は多かったが、「風俗」はそれほど多くない（62回）。これに「奴隷」（41回）や50位以下の「慰安」（28回）、「人身売買」（22回）、「買春」（20回）といった関連がありそうな単語を加えても、「日本」や「世界」に比べ、その出現回数は少ない。またネットなどでは「慰安婦」は、しばしば「韓国」と関連づけられるが、橋下氏の語りは必ずしもそうではない。むしろ「韓国」の出現回数（43回）は、「アメリカ」（195回）と比べても非常に少ない。

表 1：抽出上位50語のリスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
日本	507	強制	89	違う	62	報道	53	国家	45
慰安婦	234	考える	89	風俗	62	メディア	52	毎日新聞	44
世界	229	政治	87	戦場	60	国	52	韓国	43
問題	201	各国	86	反省	59	戦場	51	性的	43
アメリカ	195	責任	80	政府	57	発言	49	人	42
女性	173	当時	80	制度	56	過去	48	評価	42
事実	140	必要	78	歴史	56	関係	48	拉致	42
認める	112	連行	74	話	55	見る	46	正当	41
性	99	人権	73	批判	54	現地	46	奴隷	41
活用	96	軍	68	議論	53	主張	46	悪い	40

メディアは橋下氏の「慰安婦問題」「風俗活用発言」を大きく取り上げていたが、橋下氏が繰り返し発言していたのは「日本」や「世界」「アメリカ」だったようである。またこうした「国家」を強調する発言は、「慰安婦問題」という文脈でなされたはずだが、意外なほど「韓国」の出現回数は少ない。これは反韓や嫌韓といった流れとのギャップを物語るものとして興味深い⁹。

3-2. 発言媒体別にみるコメントの特徴

つぎに橋下氏の発言の媒体別の特徴をみていく。KH Coder には、単に語の出現回数をカウントするだけでなく、データ全体と比べてより高い確率で出現している語を抽出できる機能がある。これによってデータ中の特定箇所に特徴的な語を確認することができる。

表 2：発言媒体別の特徴語

ツイッター		囲み取材		外国特派員会見	
日本	.186	問題	.090	女性	.141
慰安婦	.099	アメリカ	.079	日本	.123
世界	.094	考える	.053	事実	.089
活用	.051	認める	.049	問題	.080
性	.043	話	.047	国家	.069
各国	.041	強制	.043	韓国	.067
強制	.039	活用	.039	世界	.066
批判	.038	当時	.036	民間業者	.065
政治	.037	風	.036	人身売買	.064
メディア	.037	いま	.036	考える	.063

※数値は Jaccard の類似性測度

今回の橋下氏のテキストデータには、①ツイッターでのコメント、②囲み取材での回答、③5月27日の日本外国特派員協会会見の回答と文書という区分を設定した。①および②は彼の日常的な情報発信の場であり、③は、海外メディア向けに特別に用意された発信の場である。これらがそれぞれどのような語りの特徴をもっているのかを表2から確認していく。

まず橋下氏のコメント全体のなかで出現回数の多かった「日本」「慰安婦」「世界」といった単語は、ツイッターに特徴的であった。それらはたとえば次のような形で使われていた。(太字は特徴語、下線は類似語)。

第二次世界大戦当時、**日本**国軍だけでなく、**世界各国**の軍もいわゆる**慰安婦制度**を**活用**していた。当時は必要とされ、これが戦場での**性**の現実だ。今後は同じことは許されないが、当時はそうだった。日本国の**慰安婦制度**を正当化するのではない。**日本**だけが不当に侮辱を受けることは反論しなければならない(5月15日)。

「慰安婦」問題について「日本／世界」を対置させ、日本は世界に対して反論すべきことは反論すべし、という単純な主張がツイッターで繰り返される。140字という字数制限のあるツイッターでは、一つ一つの発言についての論理

的つながりは重要でない。気分やテンションの共有がコミュニケーションの目的であり、「それが果たせなければその関係は解消される」(木村、2012:195)。「日本／世界」に限らず、単純な対立図式の繰り返しは彼のツイッターの一つの特徴であり、論理でなくテンションを共有するフォロワーから、「(橋下氏は)世界に対してものを言える日本の政治家」といった支持を形成するツールの一つとなっているようだ。

つぎに囲み取材での発言をみると、「問題」「アメリカ」「強制」という出現回数の多かった語の他に「考える」「認める」という動詞が特徴語として抽出されている。「アメリカ」「強制」以外は、使われる文脈への依存性の高い言葉である。たとえば「問題」は、慰安婦問題のほかに、原発問題、予算の問題、法的問題などでも使われる。「考える」「認める」も、「何を」という目的語に意味があり、囲み取材は、ほかの発信媒体に比べ、語りの特徴が見えにくい。

囲み取材の発言の場合、記者からの質問への回答という形式のため、ツイッターほど一方的に単純なメッセージを発信できない。また橋下氏は記者からの鋭い質問や自分の発言の矛盾点を突かれたとき、しばしば逆質問という方法や、論点をずらして回答する方法をとる。このような受け答えでは、一つのテーマについて議論が深まっていく(具体的な語りが成立する)ことは難しい。囲み取材の特徴語が他の媒体に比べ文脈依存の高い単語が多いのは、こうした理由によるのではないだろうか。

最後に5月27日の外国特派員会見では「女性」「事実」「日本」「世界」のほか、出現回数の少ない「人身売買」「民間業者」も特徴語として抽出される。特徴語は次のような語りに現れる。

「**民間業者**の施設においても**人身売買**はある、あったわけです。そうしますと、**日本**の軍の一定の関与の下**の施設と、民間業者の施設、人身売買**という点では両方悪く、変わることはないと思います。そこを**日本**だけでなく、**世界各国**に目をむけてもらいたいのです。」

慰安婦発言についての記者会見は囲み取材と対照的に、その語りには一定のパターンがみられた。場当たりの発言はなく、記者からの質問に対して、類似のロジックが展開される。事態の沈静化を図り、橋下氏の「真意」を伝えるための27日の会見では、「慰安婦」あるいは「風俗」という問題について、何をいかに語るかが確定されていたといえるだろう。

4. 橋下発言にみる「慰安婦」「風俗」の語りの構造

橋下氏のデータ全体で出現回数の多い語、発言媒体別に特徴的な語を確認してきた。この結果をふまえ、「慰安婦」「風俗」というテーマやそれに関連する事柄が、どのような語りを用意したかを整理していく。そのためにコーディング作業を行い、94の単語からなる12のコードを作成した（表3）¹⁰。これらコードの出現率を、クラスター分析の結果とあわせてグラフ化したものが図1である。

表3：コード一覧表

コード	コード構成語
*韓国中国	韓国／朝鮮／北朝鮮／日韓／朝鮮半島／韓／中国／中華人民共和国／中国人／中韓／中共／朝鮮戦争
*アメリカ	アメリカ／日米／欧米
*世界	外国／世界／各国／海外／国外／国際／諸国／他国
*日本	日本／日本人／日本国／国家
*戦争・軍	戦争／敗戦／紛争／軍隊／軍／軍人／基地／兵／兵士／海兵隊／第二次世界大戦／大戦／戦時／戦地／太平洋戦争／戦場／ベトナム戦争
*性の問題	レイプ／強姦／性犯罪／性病／強制／拉致／暴行／連行／犯罪／奴隷／人身売買
*慰安制度・公娼制度	慰安婦／慰安／公娼
*民間買春・私娼	民間／現地／業者／民間業者／売春／買春／性行為／私娼／街娼／娼婦
*風俗・自由恋愛	風俗／サービス／自由恋愛／自由意思／
*人権	人権／尊厳
*女性	女性
*メディア	朝日新聞／毎日新聞／メディア／TBS／文春／報道／週刊誌／週間朝日／テレビ／新聞／テレビ朝日／フジテレビ／毎日jp／毎日デイリーニュース／読売新聞／産経新聞／日経新聞／朝日放送／MSN産経ニュース

図1で、12のコードは大きく4つのカテゴリーに分類される。1つめは「慰安婦・公娼制度」「世界」「性の問題」「日本」というカテゴリーで、「Ⅰ慰安婦問題」と呼ぶことにする。2つめは「女性」「人権」「アメリカ」「戦争・軍」からなるカテゴリーで、「Ⅱ女性の人権問題」と名付ける。3つめが「風俗・自由恋愛」「民間買春・私娼」「韓国中国」のコードで、「Ⅲ民間性労働」のまとまりとみる。残りの「メディア」は、「Ⅳメディア批判」とする（以下、便宜上、それぞれⅠ～Ⅳとして表記）。橋下氏のコメント全体が、大きくⅠ～Ⅳに整理されたわけだが、これらがそれぞれにどのような関連をもって「慰安婦」「風俗」という性についての語りを構成しているかを検討していく。

Ⅰ～Ⅳのうち、5月13日から27日までの全期間で出現し続けているのがⅠである。Ⅰを構成するコード間の関係をみると、ほかの分析で確認したのと同様の傾向が指摘できる。つまり慰安婦制度について日本軍が関与したことは間違

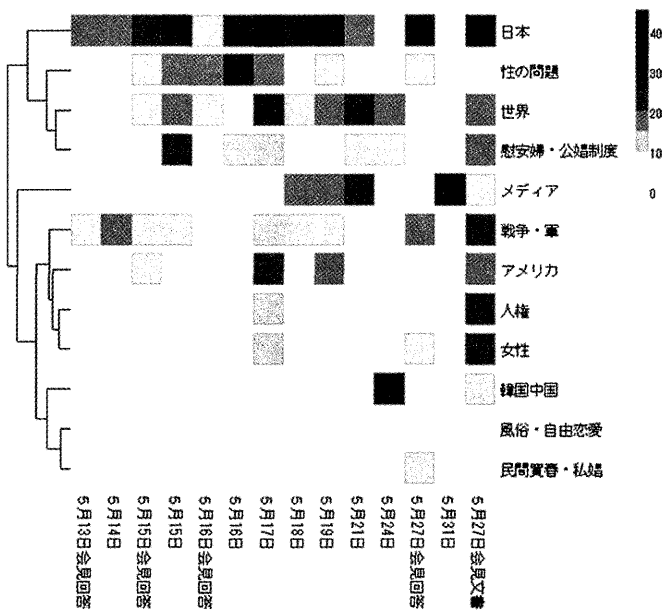


図1：コメント別コード出現率のクロス集計（単位：%）

いないが、戦場の性の問題については、世界各国の軍も加害者として、日本同様にその歴史に真摯に向き合う必要があるという主張である。

Ⅱでは、そんな戦場の性の問題の現在進行形として、アメリカ兵士による沖縄の女性に対する人権侵害が問題提起される。橋下氏は27日の会見文書で、「女性の人権を尊重する世界をめざしていきたい」など、女性の「人権」「尊厳」という価値の重視こそ、彼の発言の「真意」だったと繰り返している。ただしその「真意」は会見文書以外では、アメリカのサキ報道官に名指しで批判された5月17日のツイッターで出現する程度で、27日の会見当日の回答でさえ「人権」「尊厳」という言葉はほとんど使われていない。

そして慰安婦制度により尊厳や人権を蹂躪された「韓国中国」というコードが含まれるⅢは、「人権」「尊厳」と関連がなく、「民間買春・私娼」と出現する。「韓国中国」の女性を拉致、人身売買したのは民間業者で、日本がそれを国家の意思で行った歴史的事実は明確でないことが論じられる。ちなみにⅢを構成する「風俗・自由恋愛」コードについては、「風俗活用発言」をした5月13日と、その発言の不適切さを認めた16日の会見以外ほとんど語られていない。

以上、Ⅰ～Ⅲは慰安婦問題に直接関連するカテゴリーだったが、Ⅳはどうか。

図1をみると、Ⅳの出現率は、サキ報道官から批判を受けた翌18日から高くなっている。「私がした発言のひとつの「ワード」が抜き出されて報道されたのが、今回の騒動の原因です」と挨拶をした27日の会見以降の経過については、2-4節でみたとおりだが、ではこれは「慰安婦」「風俗」問題とはまったく別のテーマだろうか。

高田明典(2013)は、ネット上では「AならばB」という「反射的思考」が重視され、「一つの主張をじっくりと吟味する時間」がないと指摘している(131)。またネットで「事実」を探すとき、私たちは「自分の価値観を補強してくれるページ」や、「自分と同じ方向性の意見」の書き込みだけを涉獵していく(179)という。橋下氏が慰安婦問題の文脈で、メディアについて「バカ」「誤報」といった主張を繰り返すとき、まさにこうした「反射的思考」が彼のフォロワーなどの間で引き起こされている。「朝日毎日の慰安婦問題に対する

執拗さは、中国や朝鮮の日本府に対する執拗さと、シンクロして見える。これは組織ぐるみの国家犯罪と断定して良い」「毎日新聞なんてケチな新聞を相手に戦うのは時間の無駄だ。あなたが戦う相手は、最初に従軍慰安婦問題をでっちあげた朝日新聞だ」¹¹など。なかには橋下氏に批判的なコメントもあるが、橋下氏のメディア批判に賛同するものが多くの支持を集めている。彼のメディア批判がエスカレーションするほど、「従軍慰安婦問題をでっちあげた朝日新聞」という形で、慰安婦問題が捏造・虚報として否定される。メディアが慰安婦問題を「問題にする」こと自体が、「橋下憎し」のメディアの陰謀のように語られる。自分たちと反対の意見は、「マスゴミに騙されている」「韓国に買収されている」など、「A ならば B」と反射的に思考される。橋下氏のメディア批判は単に彼の主張の「正当化」だけでなく、メディアの情報をどう読むべきかという文脈を用意している。そしてすでにあった「慰安婦問題自体がメディアによる捏造」という言説¹²を活気づける養分となり、橋下氏の「慰安婦発言」についての批判を無効にする機能を果たしている。

以上の議論をふまえ、Ⅰ～Ⅲそれぞれのカテゴリー間の関連を図2のように表した。Ⅳはこの図の文脈を設定するものであるが、今回の議論では割愛する。

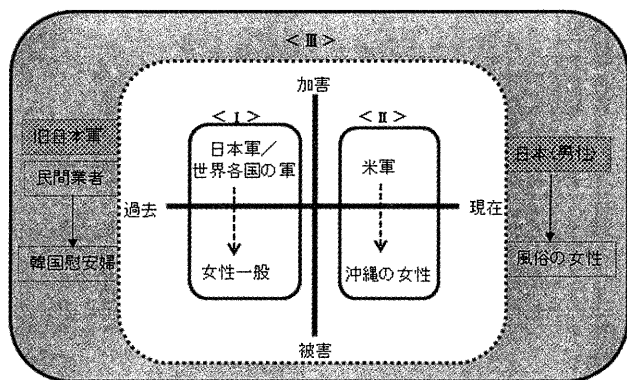


図2：「慰安婦」「風俗」発言の構造

I～Ⅲは、戦場の性という問題の、1) 加害—被害という関係性と、2) 過去—現在の時間軸とを組み合わせた語りとなっている。そしてIとⅡは27日会見で橋下氏が「真意」として可視化した語りであり、Ⅲは言語化されなかった、あるいは不可視にされた語りである。この図から橋下氏の発言が国内のある層から支持されながら、海外からの理解は得られなかった理由がみえてくる。それが慰安婦問題の「一般化／特定化」という操作と「二重基準」の適用である。

Iで慰安婦問題は、戦場における性の問題として一般化される。女性を性の対象として利用することが女性の尊厳を蹂躪する行為であり、公娼か私娼か、軍管理か民間運営かも関係ない。その意味で、過去に慰安婦を利用した日本軍が許されないことはもちろんだが、第二次世界大戦時の世界各国も女性を性的に利用した事実から、同じ加害の主体として位置づけられる。

Ⅱでは、戦場の性の問題は沖縄の女性への人権侵害として特定化される。被害の側の特定は、加害の主体として「アメリカ兵士」を特定することにもなる。そして「現代」という時間軸で軍隊を持たない日本が、加害の主体になる可能性は暗黙のうちに排除されている。「一般化／特定化」の操作が、「過去／現代」というそれぞれの時間軸でなされることで、加害の主体としての「世界」や「アメリカ」が明示されるのに対し、「旧日本軍」や「日本」の姿は曖昧にされる。

この語りに「二重基準」が適用されると、性の問題における「日本〈男性〉」という主体は一層不可視にされていく。それがⅢである。IおよびⅡでは、「性の対象として女性を利用することが女性の尊厳の蹂躪」という理由で、日本のみならず世界各国やアメリカも加害の主体であることを強調した。しかし戦場の性の問題が、「韓国中国」の慰安婦に特定化されるとき、加害の主体として特定されるのは「日本」ではなく、「民間業者」となる。「日本」は、「国家の意思として」拉致・人身売買をした証拠はないという理由で、加害の主体の特定化が回避される。なおかつ韓国慰安婦の問題には、「女性の尊厳」という普遍的価値は適用されない。日韓基本条約という「法的」基準が採用され、それによって解決済みの問題とされてしまう。こうして韓国の「女性の尊厳の蹂躪」をした「日本軍」「日本国家」という加害の主体は不在になっていく。

そしてもう一つ「二重基準」が適用される語りが、Ⅲの「風俗・自由恋愛」である。橋下氏はアメリカ軍の「自由恋愛」は現地女性を性的対象として利用しているから、「女性の尊厳の蹂躪」だと批判した。しかし日本の「風俗」で働く女性たちは、「自由意思」によるので「積極的に活用すればよい」と語られる。「女性を性的対象として利用する」ことが問題ならば、米軍の自由恋愛も風俗も同じく問題となるはずだが、橋下氏は「風俗は買春ではない」からまったく違うと反論する。日本の風俗で働く女性には、韓国慰安婦同様に「女性の尊厳」という基準は適用されない。そして韓国慰安婦同様、風俗は合法だから問題ないという「法的」基準が採用され、「性的対象として利用する側／される側」の非対称な関係性自体が存在しないことになる。

さらに現代の日本の性的問題に関連する「風俗・自由恋愛」には、もう一つ「見えない語り」が埋め込まれている。「自由恋愛」の主語は「アメリカ軍兵士」で、彼らが現地女性を性的に利用するという関係性が顕にされる。しかし「風俗」の場合、主語はそこで「働く女性」であり、彼女たちが「自由意思」でその性を利用していることが主題化される。彼女たちが一体誰に自由意思で体を提供するのか、誰が「風俗で働く女性」を性的に利用するのかという主語が決して登場しない。Ⅲの「風俗」という現代の日本の性についての語りでは、「女性を性的に利用する」主体（すなわち「日本〈男性〉」）が、まったくの透明人間になってしまっているのである。

IとⅡが「女性の尊厳の蹂躪」という基準によって、「世界」や「アメリカ」を加害の主体として顕在化させる。一方、その基準の適用を回避したⅢの語りは、加害の主体としての「日本」を不可視化する。このような構造によって、橋下氏の「真意」は「私（日本）も悪いが、あなた（世界）だって悪かったでしょ」という言い逃れと解釈され、「日本」が自らの加害を直視していないと評価される。そして橋下氏の主張を支持していたある種の人々にとって、自らの加害性を直視しないこの語りの構造は、なんらかの「安心」を担保してくれるのかもしれない。

おわりに

「慰安婦」や「風俗」という性をテーマとした橋下氏の語りの構造をみてきた。その意図はもちろん、彼個人の語りの矛盾や問題点を指摘することにあるのではない。この一連の出来ごとにおける彼の語りの変遷と、様々なアクターとのやり取りのなかで練り上げられた「真意」の構造は、性について語る際に、なにを正論とみなし、どのような常識が「自明のもの」として滑り込んでいるかを明らかにする手がかりとなる。

慰安婦問題の研究に取り組む秦（1999）が、戦時中インドネシアでオランダ人女性に売春を強制し、戦後、死刑となった岡田慶治少佐の手記を紹介している。獄中で彼はこう記している。

将校クラブの婦人たちをよく可愛がってやったつもり……その彼女たちが告訴している。（略）時勢が変わったので我々に協力していたことになっては彼女達の立場がないのかと想像……起訴状を見ると首謀者にされている……「そうか飼犬に手を咬まれたのだ。もう何も言うことはない」と覚悟した（秦、p220）。

将校クラブの婦人たちとは、インドネシアで収容されていた抑留所から、日本軍の慰安所に移送されたオランダ人女性たちのことである。武力で支配された側の女性が、銃や軍刀をもった日本軍人にレイプされ、売春を強要された。命の危険に怯え、家族の安否を思い脱走もできない。将校クラブでどんなに「可愛がってやったつもり」だとしても、そこには抑圧する者と抑圧される者との圧倒的な権力関係が存在している。暴力から逃れ、命を守るために媚をうって笑う女性たちの屈辱や怒りに対する想像力はここには無い。「飼犬に手を咬まれた」という言葉から、自分たちが支配する側であったことへの無自覚さ、そして抑圧される者に対する鈍感さがうかがえる。

今回の橋下氏の発言をめぐる一連の出来ごとの中でも、こうした「無自覚」

な暴力が、なんの疑いもなく表出されていた。「若い人たちが明日にも死ぬ（ような状況）」中で、コンフォート（慰安）を求めた気持ちは理解できなくもない。（橋下氏は）おおむね正しい」とした大阪・茨木市長の発言は、「若い人＝男性」が死ぬことには同情しても、そのような男性の「慰安」のために使われる「女性」の苦しみには鈍感である。いや、ここに「女性」という人間がいることにすら気づいていない。それは「コンフォート（慰安）」であって、人間ではないのである。そしてなにも「慰安婦」問題に限らずとも、これと同様の語りは私たちの日常生活にあふれている。セクシュアルハラスメントや家庭内暴力。「男は外で働いているから、女は安らぎを与えろ」とまで古風なことを言う人はいないかもしれないが、仕事と家庭の両立の負担は、今なお女性に過剰である。そして「風俗で働く女性は自由意思だから、積極的に活用してよい」と、なぜ活用している側の人間が発言できるのだろうか。もちろん「自由意思」で働く女性もいるだろう。しかしそうでない女性たちもいるだろう。そしてそうでない女性たちは、自分たちが「自由意思」で働いているかどうかを語ることさえない女性たちでもある。

性をめぐっての「正論」や明示される語り。そんなドラを叩き鳴らすような大声に、抑圧され、不在とされた声にこそ、私たちは耳を澄ましていくことが求められるのではないだろうか。

参考文献

- 秦郁彦 1999『慰安婦と戦場の性』新潮社
- 樋口耕一 2004「テキスト型データの計量的分析 ―2つのアプローチの峻別と統合―」『理論と方法』19(1): 101-115
- 2004「計量機による新聞記事の計量的分析 ―『毎日新聞』にみる「サラリーマン」を題材に―（特集：非定型データ分析の可能性）」『理論と方法』19(2): 161-176
- 2005「計量テキスト分析の方法と実践」大阪大学大学院人間科学研究科平成16年度 博士論文
- 景山佳代子 2010『性・メディア・風俗』ハーベスト社

木村忠正 2012『デジタルネイティブの時代—なぜメールをせずに「つぶやく」のか』
平凡社

モラン、エドガール 1973『オルレアンとうわさ』みすず書房

高田明典 2013『ネットが社会を破壊する』リーダーズノート出版

吉見義明編集・解説 1992『従軍慰安婦資料集』大月書房

吉見義明 1995『従軍慰安婦』岩波新書

——— 2010『日本軍「慰安婦」制度とは何か』岩波ブックレット No.784

参考 URL：（ ）内はアクセス日

立命館大学グローバル COE 生存学創世拠点「橋下市長（大阪府大阪市）「従軍慰安婦」・
在沖米軍関連発言（2013年 5 月 13 日）」（2013.9.3）〈<http://www.arsvi.com/d/hf.htm#1>〉

取材映像（登庁時ぶらさがり取材は「登庁」、退庁時は「退庁」、橋下徹大阪市長については省略）

【2013.5.13】登庁（2013.9.28.）〈<http://www.youtube.com/watch?v=zMjVAaZBb0Y>〉

【2013.5.13】退庁（2013.9.28）〈<http://www.youtube.com/watch?v=MFLhFo-4xWk>〉

【2013.5.15】登庁（2013.9.28）〈<http://www.youtube.com/watch?v=NJHroVOuoZM>〉

【2013.5.15】退庁（2013.9.28）〈http://www.youtube.com/watch?v=n_jilhqxwt4〉

【2013.5.16】登庁（2013.9.28）〈<http://www.youtube.com/watch?v=sgxT3LqKbjQ>〉

【2013.5.17】退庁（2013.11.4）〈<http://www.youtube.com/watch?v=tqAs6LI71vc>〉

【2013.5.20】退庁（2013.11.4）〈<http://www.youtube.com/watch?v=YMHO-7u2vrE>〉

【2013.5.27】外国特派員（2013.9.28）〈http://www.youtube.com/watch?v=V3FUJ3_D8jI〉

【2013.5.28】退庁（2013.11.4）〈<http://www.youtube.com/watch?v=zJKuHXOgGmY>〉

【2013.5.29】定例会見（2013.11.4）〈http://www.youtube.com/watch?v=5Bx7_c8cQ7Q〉

【2013.5.30】退庁（2013.11.4）〈<http://www.youtube.com/watch?v=zFVbIaq6xao>〉

「SYNODOS」記者会見文字起こし

【2013.5.13】（2013.9.13）〈<http://synodos.jp/politics/3894>〉

【2013.5.15】（2013.10.5）〈<http://synodos.jp/politics/4014>〉

【2013.5.16】（2013.9.13）〈<http://synodos.jp/politics/3945>〉

「BLOGOS」橋下徹氏ツイッターと 5 月 27 日会見文字起こし

【2013.5.14】（2013.9.13）〈<http://blogos.com/article/62251/?axis=b:9497&p=1>〉

【2013.5.15】（2013.9.13）〈<http://blogos.com/article/62337/>〉

【2013.5.16】（2013.9.13）〈<http://blogos.com/article/62442/>〉

【2013.5.17】（2013.9.13）〈<http://blogos.com/article/62481/>〉

- 【2013.5.18】(2013.9.13) <<http://blogos.com/article/62544/?axis=b:9497>>
【2013.5.19】(2013.9.13) <<http://blogos.com/article/62649/?axis=b:9497>>
【2013.5.21】(2013.9.13) <<http://blogos.com/article/62718/?axis=b:9497>>
【2013.5.24】(2013.9.13) <<http://blogos.com/article/62944/?axis=b:9497>>
【2013.5.31】(2013.9.13) <<http://blogos.com/article/63354/?axis=b:9497>>
【2013.5.27】(2013.9.3) <<http://blogos.com/article/63100/>>

注

- 1 フォーリン・プレスセンター (2013.12.28)
<<http://fpcj.jp/worldnews/through/p=3574/>> より
- 2 ここでいう「出来ごと」はエドガール・モランの「出来ごとの社会学」から着想を得ている。
- 3 本研究で使ったデータについては参考 URL に一覧で記載。
- 4 KH Coder は樋口耕一氏が開発した計量テキストデータのための無料分析プログラムである。その詳細については <<http://khc.sourceforge.net/>> を参照のこと。
- 5 朝日新聞デジタル (2013.5.12)
<<http://www.asahi.com/politics/update/0512/TKY201305120076.html>> より
- 6 今回、全文文字おこしを掲載した『SYNODOS』では、「猛者集団といえますかね」という発言部分はなかったが、You Tube でアップされていた当日の記者会見では、橋下氏がこう発言していることがはっきりと聞き取れるため、引用部分には加筆している。
- 7 「橋下氏訪問に文書で「拒絶」通告 米サンフランシスコ氏」(東京新聞 2013.11) 共同通信
- 8 テキストデータの量的分析手法におけるコンピュータコーディングプログラムの利用については、拙著 (2010) で論じている。また樋口耕一 (2004, 2005) は、注 3 で紹介したサイトにて閲覧可能である。
- 9 これはネット上だけでなく、テレビでもみられた。『たかじん no マネー』(テレビ大阪、毎週土曜日昼1時～) という関西ローカルの番組で2013年6月1日に橋下氏の慰安婦発言を取り上げる特集が組まれた。タイトルは「暴走する朝鮮半島 SP」。番組冒頭で、橋下氏の慰安婦発言を取り上げながら、朝鮮半島 (韓国・北朝鮮) の日本に対する不穏な動きを煽る構成になっていた。番組では視聴者に「橋下氏の発言は問題か／でないか」を問う電話投票を実施し、番組最後に圧倒的多数で「問題でない」という結果が発表された。しかし、なぜ橋下氏の「慰安婦発言」の議論に、「暴走する朝鮮半島 SP」という番組タイトルがつけられ、この二つを並列して番組を制作したのか。ネット上では、視聴者の電話投票の結果を、「マスメディアに踊

- らされない視聴者」「テレビに出ている奴らの思惑にのらない視聴者」というコメントもあった。しかし番組構成からは、慰安婦発言を問題だとするコメンテーターもまた、番組のアジェンダ設定を強化するための「演出」の一つにしか見えない。
- 10 コード中には、今回データには出現していない単語があるが、これは橋下氏のツイッターのフォロワーのコメントを分析する際に登場してくる単語を含めているからである。全く異なるデータ群を、同一のコーディングルールで分析できるという点も、コンピュータコーディングの利点の一つである。
 - 11 BLOGS 橋下氏ツイート（5月31日）へのコメント
<<http://blogos.com/article/63354/forum/>>
 - 12 慰安婦問題捏造の主張には、秦郁彦（1999）の第七章「吉田清治の作話」がしばしば論拠として使われているようである。秦は「吉田清治の作話」とそれに「入れ込んだマスコミとくに朝日新聞」と論じており、これが「従軍慰安婦はマスコミによる捏造」という形で（データ元を知らないであろう人々にも）広く流布し、繰り返し使われているようである。